

山本周五郎

柳橋物語・むかしも今も

新潮文庫

新潮文庫 草 128

昭和三十五年六月二十五日 発行
昭和四十五年二月二十五日 十二刷

著 者 開 高 健

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便 番 号 一六二
東京 都 新宿 区 矢 来 町 七 一
電 話 東京 (〇三) 二六〇 一一一
振 替 東 京 八 〇 八 番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

柳橋物語・むかしも今も

山本周五郎 著

新 潮 社 版

1627

目次

柳橋物語……………七

むかしも今も……………一五

解説 奥野健男

柳橋物語・むかしも今も

柳橋物語

前篇

一

青みを帯びた皮の、まだ玉虫色に光っている、活きのいいみごとな秋鰯^{あきあじ}だった。皮をひき三枚におろして、塩で緊めて、そぎ身に作って、鉢に盛った上から針しょうがを散らして、酢をかけた。……見るまに肉がちりちりと縮んでいくようだ、心はずむように楽しい、つまには、青じそを刻もうか、それとも蓼^た酢^でを作ろうか、歌うような気持でそんなことを考えていると、店のほうから人のはなし声が聞えて来た。

「いったいいつまでにやればいいんだ」

「無理だろうが明日のひるまでに頼みたいんだ」

「そいつはむづかしいや、明日までというのがまだ此処にこれだけあるんだから、まずできない相談だよ」

「そうだろうけれど、どうしても爺^{じい}さんの手で研^といで貰^{もら}いたいんだ、そいつを持って旅に出るんだから」

「旅へ出るって」源六のびっくりしたような声が聞えた、「……おまえが旅へ出るのかい」

「だから頼むのさ、爺さんに研ぎこんで置いて貰えば安心だからな、無理だろうけれどそれでやって来たんだよ」

庄吉の声だった。おせんは胸がどきつとした、庄さんが旅に出る、出仕事だろうかそれとも、そう思っただけにもなく耳を澄ました。

「そうかい」と源六が返辞をするまでにはかなりの間があった、「……じゃいいよ、やっておくから置いていきな」

「済まない、恩に衣るよ爺さん」

そしてその声の主は店を出た。おせんがその足音を耳で追うと、それが忍びやかに、けれどすばやくこの勝手口へ近づいて来た。おせんはその腰高障子をそっと明けた、庄吉が追われてでもいるような身ぶりですつと寄って来た。血のけのひいた顔に、両の眼が怖いような光を帯びておせんを見た、彼は唇を舐めながら囁くように言った。

「これから柳河岸へいって待っているよ、大事なはなしがあるんだ、おせんちゃん、来て呉れるかい」

「ええ」おせんは夢中で頷いた「……ええいくわ」

「大川端のほうだからね、きつとだよ」

そう念を押すとすぐ庄吉は去っていった。おせんは誰かに見られはしなかったかと、……どうしてそんなことが気になるかは意識せずに、……横丁の左右を見まわした。向う側にはかもし屋に女客がいるきりで、貸本屋も糸屋も乾物屋もひっそりとしているし、主婦がおしゃべりでいつ

も人の絶えない山崎屋という飛脚屋の店も、珍らしくがらんとして猫が寝ているばかりだった。障子を閉めたおせんは、箆ざるにあげてある青じそを取って、組板まいたの上に一枚ずつ重ねて、庖丁ぼうちようをとりあげたまま暫しばらくそこに立ち竦すくんでいた。なんと言つて家を出よう。そんなことは初めてなので、怖いようでもあるし、お祖父じいさんに嘘うそを言うことが辛かった。けれども頭のなかでは庄吉の蒼あおざめた顔や、思い詰めたようなうわずった眼や、旅に出るといふ言葉などが、くるくると渦を巻くように明滅し、彼女の心をはげしくせきたてた。……そうだ、おせんは組板の上の青じそを見てふと気づいた。柳原堤やなぎわらどてへいつも出るはしり物屋がある、このあいだ通りかかったら独活うどがあった、あれを買つて来てつまにしよう、駈かけてゆけば庄吉の話を聞くひまくらいはあるだろう、おせんは前垂で手を拭ふきながら台所からあがった。

「お祖父さん、ちよつといつて鰻うなぎのつまにする物を買つて来ますよ」

「鰻うなぎのつまだつて」源六は砥石から眼をあげずに言った、「……つまなんか有合せで結構だぜ、あんまり気取られると膳ぜんが高くなつていかねえ」

「それほど物じゃありませんよ、すぐ帰つて来ますからね」

そしてなおなにか呼びかけられるのを恐れるように、店の脇わきから出て小走りに通りのほうへ急いでいった。……中通りをまっすぐにつき当ると第六天だいろくてんの社である、柳原へはそこを右へ曲るのだが、おせんは左へ折れ、平右衛門町をぬけて大川端へ出た。

隅田川すみだがわは夕潮でいっぱいだった。石垣いしがきの八分めまでたふたとあふれるような水からはかなりつよく潮の香が匂におつてきた、初秋の昏たそがれがたの残照をうけて、川波は冷たくにぶ色にひかり、ひとところだけ明るく雲をうつしていた。竹屋の渡しあたりを川上へいそぐ小舟が見えるほかは、

広い川面に珍らしく荷足も動かず、鷗の飛ぶようすもなかった。……河岸ぞいに急いでゆくと、足音に驚いて小さな蟹が幾つも、すばやく石垣の間へ逃げこむのがみえる。ついするとそれを踏みつけそうで、おせんははらはらしながら歩いていった。神田川のおち口に近い柳の樹蔭の、もうす暗くなつたところに庄吉は立っていた。柳の樹に肩をもたせて、腕組みをして、どこやらのぬけたような姿勢で、ぼんやり川波を見まもっていた。

「有難うよく来て呉れた」

彼はおせんを見ると縫りつくような眼をした。

「あたし柳原まで買い物をしにゆくつもりで出て来たの、遅くなつては困るし、もし人に見られるときまりが悪いから……」

「話はすぐ済むよ」庄吉はおせんよりおどおどしていた。ふだんから色の白い顔が、血のけもないほど蒼くなり、大きく瞠らいている眼は、不安そうに絶えずあたりを見まわすのだった。「……今朝とうとう幸太と喧嘩をしてしまった、おれはがまんして来た、きょうまでずいぶんできないがまんをして来たんだ、けれどもどうせいつかはこうなる。おれか幸太か、どっちか一人はこの土地を出なくちゃあならないんだ、そして幸太が頭梁の養子ときまつたからには、出ていくのはおれとわかりきっていたんだ」

「でもどうして、どうして喧嘩になんぞなつたの、幸さんとどんなことがあつたの」

「今朝のことなんかたいしたことじゃあない、ただ喧嘩のきっかけがついたというだけで、はつきり言ってしまうば……」庄吉はそう言いかけてふと口を噤んだ、それから臆病そうな、けれどもいいような烈しい眼つきで、おせんの顔をじつと見つめた、「……いやそれを言うまえに訊

いて置きたいことがあるんだ、おせんちゃん、おれは明日、^{かみがた}上方へ旅に出るよ」

「……………」

おせんはこくつと生唾^{なまつば}をのんだ。

「江戸にいれば頭梁の家で幸太の下風^{かふう}につくか、とびだしたところで、一生叩き大工で終るよりほかはない、それより上方へいって、みっちり稼^{かせ}いで、頭梁の株を買うだけの金をつかんで帰って来る、知らない土地ならばみえも外聞もなく稼げるし、あっちは諸式がずつと安いそうだから、早ければ三年、おそくっても五年ぐらいで帰れるだろう、おせんちゃん、おまえそれまで待っていて呉れるか」

「待っているって」

おせんは声がふるえた、「…………あたし、庄さん」

「そうなんだ、きょうまで口ではなんにも言わなかったけれど、おれがおせんちゃんをどう思っていたかということはわかっていて呉れた筈だ、おそくとも五年、帰って来れば頭梁の株を買って、きつとおまえを仕合せにしてみせる、おせんちゃん、それまでお嫁にゆかないで待っていて呉れるか」

「待っているわ」おせんはからだじゅうが火のように熱くなった。そして殆んど自分ではなにを言うのかわからずにこう答えた、「…………ええ待っているわ、庄さん」

「ああ」庄吉はいっそう蒼くなった。「…………有難うおせんちゃん、おかげで江戸を立つにもほりあいがある、そしてその返辞を聞いたから言うが、実は幸太もおせんちゃんを欲しがっているんだ、喧嘩のもととは詰りそれなんだ、だからおれがいなくなれば、きつと幸太はおまえに言い寄る

だろう、そいつは今から眼に見えている、だがおれはこれっぽっちも心配なんかしやあしない、おせんちゃんはおれを待っていて呉れるんだ、どんなことがあっても、そう思っていていいな、おせんちゃん」

そのときおせんは譬え^{たと}ようもなく複雑な多くの感情を経験した。あとになって考えると、わずかに四半刻^{しはんとき}ばかりのその時間は、彼女の一生の半分にも当るものだった。……おせんは覚えていて、そのときあたりは昏れ^{たそが}かけていた。つい向うに見える両国の広小路も、川を隔てた本所の河岸^{ほんじよ}も、このあいだまでは水茶屋に灯がはいり、涼み客のざわめきで賑わ^{にぎ}っていたのに、いまは掛け行燈^{あんどん}の光もなく並んだ茶店はもう女たちも帰ったのだろう、ひっそりと暗く葭簾^{よしず}が巻いてある、もう肌さむいくらいな川風に、柳の枯葉はあわれなほど脆^{もろ}く舞い散り、往来の人の忙しげな足どりも、物売のかなしげな呼びごえも、すべてが秋の夕暮のはかなさを思わせるものばかりだった。

庄吉に別れるとそのまま家へ帰った、もう柳原へいつて来るには遅いと思ったから。帰るみちみち、おせんの胸はあふれるような説明しようのない感動でいっぱいだった。それは生れて初めて、あまい、燃えるような胸ぐるしいほどの感動だった。庄吉と逢^あったわずかな時間、庄吉から聞かされた短かいその言葉、その二つが彼女のなかに眠っていた感情と感覚とをいっぺんによび醒^さましたのである。街の家並もたそがれのあわただしい景色も、常と少しも違っ^{ちが}ってはいないのだが、今のおせんにはびっくりするほど新しくもの珍らしいように思え、こんなにしっとりしたいい町だったのかと見なおすような気持ちだった、源六はもう灯をいれて、砥石^{とどし}に向っていた。「おそくなって済みません」おせんはそう声をかけながら、店へはいろいろとしてふと気がつき表に掛けてある看板を外した、雨かぜに曝^{さら}されてすっかり古びているが、まん中に御研ぎ物、柏屋^{かしわや}

源六と書き、その脇へ小さな字で、但し御槍なぎなた御腰の物はごめんを蒙ると書いてある、おせんは看板の表の埃を払いながらいった「……このあいだ独活があったのでいって見たのだけれど、きょうはあいにくどこにもないのよ、おじいさん、かんにして下さいね」

「だから有合せでいいって言ったんだ、つまなんぞどうでも秋鰯の酢があればおれは殿様だぜ」

「それではすぐお膳にしますからね」そしておせんはもう暗くなった台所へはいっていった。

二

庄吉はその明くる日、たのんだ研ぎ物を受取りかたがた別れに來た。源六には「三年ばかり上方で稼いで来る」と言っただけで精しい話はしなかった、おせんには達者でいるように言い、おmoiをこめた眼でじっとみつめながら、まるで泣いているような微笑をうかべた。そしてその日午後、品川のほうにある親類の家から旅に立つ筈で、茅町の土地を去っていった。

おせんは四五日ぼんやりと、気ぬけのしたような気持で日を送った。なにかしていてもふと庄吉のことを考えている。蒼ざめた顔や、思いつめたきみの悪いような眼や、おずおずした、けれど真実のこもった囁き声などを繰り返し繰り返し考え耽っているような日が。……その次には旅のあなたが気になりだした。もうどのくらい行ったらう、箱根はぶじに越したろうか、馴れない土地は水にあたり易いという、病みつくようなことはないかしらん、そして、よく人の話に聞く道中の恐ろしい出来事や、思いがけない災難があれこれと想像されて、ぞっと寒くなるようなことも度たびだった。こういうことが半月ほど続いたあと、少しずつ気持がおちついてくるとおせ

んは庄吉と幸太とのかかわり、かれらと自分との繋がり进行思い返した。

茅町二丁目の中通りに杉田屋巳之吉すきたやみのきちという頭梁が住んでいる、家にいる職人だけでも十人ほどあり、多く武家屋敷へ出入りをする名の売れた大工だった。おせんの家は元その隣りで髪結い床をやっていた。父の茂七もしちは彼女が十二のとき死んだが、口の重い、癪かんの強い性質で、あいそというものがまったく無いため、よく知っている者のほかは余り客も来なかった。また母は病身で月のうち十日は寝たり起きたりのありさまだったから、家の中はいつも、鬱陶うつとうしく沈んだ空気に包まれ、いつもどこかに溜息ためいきが聞えるという風だった。……おせんはごく幼い頃から、一日じゅう杉田屋の家で遊び暮らすことが多かった。巳之吉も妻のお蝶も子供が好きなのに、一粒だねの女兒が生れて半年めに死んでしまい、そのあとずっと子が無かったので、おせんがまだ乳ばなれもしないうちから、よく来ては「なんだか膝ひざさびしくって」などと言っては抱いてゆきゆきした。おせんのほうでもお蝶ちようによく馴なついて、自分の家は狭くるしく陰気で、子供ごろにもなにやら息詰るような感じだったが、杉田屋は座敷も広く人も大勢いて賑やかだし、そこにはいつも玩具おもちゃや菓子待っていた。着物や帯もずいぶん買って貰った、春秋はるあきには白粉を付け髪を結い、美しく着飾って、そのころ杉田屋にながくいた定五郎さだごろうという老人の背に負われて、巳之吉夫妻といっしょに花を見にゆき、秋草を見にいった。王子権現おうじこんげんの滝も、谷中やなかの螢沢ほたるさわも、本所の牡丹屋敷も、みなそうして知ったのである。

——おせんちゃん、小母おはさんの子におなりでないか、そのじぶんお蝶はよく頬ほずりしながらそう言った。するとおせんは生きまじめな顔になり、いかにも困ったというように首をかしげながら、あたしおっかさんの子でなければおばさんの子になるんだけれど、きまつてそういう返辞をした